ぶらりびと



清泉女子大学教授
高野禎子（たかのよしこ）さん

文化芸術に携わる方々にお話を伺い、
掛川市の文化振興のヒントをいただくこのシリーズ。
第29回は、清泉女子大学教授の
高野禎子さんにお話を伺いました。

ご自身が文化芸術に接した原体験をお聞かせください。

母方の祖父が絵描きだったので、物心ついた頃から絵具の匂いが身近にありました。天窓のある明るいアトリエで遊ぶのが好きで、一種独特な雰囲気をもったお弟子さん達の話を聞くのも楽しみでした。レンブラントの複製や棟方志功の版画、種田山頭火の句などが壁を飾っていたのを覚えています。

私は高校を出て理系に進学したのですが、途中で進路変更をして今に続いています。きっかけは大学3年生の時のヨーロッパ旅行でした。リュックを担いで約3か月間、西洋各地の教会巡りをしたのですが、その折ステンドグラスの芸術に魅了され、気が付くとその歴史を研究しています。祖父のアトリエにあった種田山頭火の句「分け入っても分け入っても青い山」…この句の意味がほんの少しわかりかけたように思います。

祖父はルオーが好きで、日記などにしばしば模写を残していました。農民の母子や観音、晩年にはキリストの磔刑（たっけい）図まで描いたようです。祖父の死の知らせを受けたのは留学先のフランスでしたが、教育者として真摯に生きた82年の生涯を懐かしく思い起こすこの頃です。

文化芸術というものをどのように捉えていますか？

生活の一部です。授業で学生にもよく話しますが、台所に立って大根や人参、ピーマンなど一つ一つ手に取って包丁を入れ、炒め物や煮物を作る際に野菜の色や形に目をやり、そっと香りを嗅いだり、手触りを確かめることはとても大切なことです。それは世界名画を見るのとまったく同じ地平に立っているのだと思っています。

さりげない日常の一コマを、ある意味で創作活動の場と捉えてみてはどうでしょう。どんな手法や材料を用いても全ての造形芸術は形と色から成るのですから、それを営む私達自身がそこに投影されるはず。あまり大上段に構えなくてもごく当たり前の営みと捉えて良いのだと思っています。